

## 編集後記

医師という職業は、自然科学と社会科学との融合を最も端的に経験できる職業のひとつだと思います。数学・物理・化学・生物に代表される自然科学を十分に理解することは医師として当然重要であり、それが還元されるのは目の前にいる患者さんであります。患者さんに対するには社会科学を理解しておく必要があるわけですから、自然科学だけでは臨床家は成り立たないのは自明のことです。外科の領域では特にこの現象は顕著です。ただ、目の前に起こった現象を自然科学として冷静に判断し、分析することがなければ当然進歩はありえないでしょう。最近、医療にも EBM の重要性が叫ばれています。エビデンス、すなわちきちんとした科学的立証のないものは排除し、科学的立証のなされた基礎の上の方針が決められていきます。原著論文にせよ、症例報告にせよ現象を自然科学として分析して誌上発表するわけですから分析結果はあくまでも正確にとらえ、「はじめに結果ありき」に追随するような解析は厳にいましむべきであります。編集委員を拝命してから約3年が経ち、いろんな論文に出会うことができました。残念ながら教室の方針という結果が先にあって、分析が結果に追随するという、おかしな論文を見かけることも少なくありません。しかし、中には自然科学として正確な分析と、それに基づいて得た結果を正しく導いた論文に出会うと編集委員会の前日の査読のための睡眠不足が一挙に解消する感がします。本号も原著4篇、症例報告16篇、臨床経験1篇を掲載することができました。本会誌が邦文論文掲載誌としてますます重要なジャーナルとなるよう、また掲載される論文がひろく EBM として引用されることを祈っています。

(鶴丸昌彦)